
Style

小室 仁

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Style

【Nコード】

N3375S

【作者名】

小室 仁

【あらすじ】

大好きなアーティストの歌の自分勝手なイメージ短編、第三話。

ここは薄暗い洞穴のような場所だ。
空中に漂う、かび臭いような古紙のおいも、
洞穴のようなイメージに加担している。

けい子はレンズの厚い、黒ぶちメガネが鼻をずり落ちるのを、
指で直して、手に持つ古い本のページをめくった。

父親の経営する小さい古本屋。
大型のチェーン店が多くはびこる今の世の中で、
こんな時代遅れの小さい店がやっていけるのは、
東京という都会だからだろう。
他の土地では、到底成り立たない商売だ。

人が一人やつと通れる通路だけを残して、
天井まで続く棚には、時代も様々ならジャンルも様々な古本が、
ぎっしりと詰め込まれている。
天井にある蛍光灯の明かりはついているとはいえ、
店の中は薄暗い。
太陽の光の明るい外から急に入って来たら、
その暗さに、一瞬視力を失うだろう。

ふと、店の入り口のガラスの引き戸が開く。
けい子は顔を上げた。古本屋の店番は、

いちいち入ってくるお客に、

「いらつしやいませ」などと挨拶はしない。

ただ黙って見て、お客という存在を認めるだけだ。

中に入ってきたのは、

およそこんな薄暗い古本屋には、似つかわしくない若い男だった。

すらりと背が高く、流行のクシャクシャツとした長めの茶色い髪、切れ長の目に通った鼻筋、魅力のある整った風貌。

デザイナーズであろうセンスの良いシャツに、

足にぴったりと張り付く黒い皮のパンツ。

ここには今時の若者が好きそうな、

音楽やファッション関係などの本は、置いていない。

純然と文学に関する本だけなので、

こういう感じの若者が、けい子の子の店に入ってくるのは、珍しい事だった。

けい子は手元の本に目を戻しつつも、

同じ行ばかりを目で追うだけで、ちっとも内容が頭に入ってこなかった。

若い男はしばらく店の中を物色すると、

そのまま出て行くかと思っていた、けい子の意に反して、三冊の本を手に取り、こちらの方へと近づいてくる。

太宰治の人間失格とパンドラの匣。

本の表紙を見て、けい子はちらりとその男の顔を見た。どう見ても、人間失格の本の主人公とは真逆な感じの、太陽の恩恵を受けているような美しい若者だ。

こんなの読むのかしら。

でもまあ、最近、太宰治作品は若いタレントで、新たに映画化もされたりして、流行だし。

自分なりに納得して次の本を見る。

武者小路実篤の友情。

またも、けい子は意外に思う。

こういう不幸を耽美とするような、暗い本を読むようなタイプには、到底見えない。

「いくら？」

けい子が考えていると、その若い男は言った。

「あ、600円です」

けい子が言つと、長めの前髪が目にかかるのを手で払いながら、男は金を払って本を受け取り、店を出て行った。

もし、本当にあの本を、あの今風の美形な男が読むのだったら、「ギャップが素敵かも」

けい子はぼそりと呟く。

それに、ああいう本を好むのだったら、相当な本好きだろう。一緒に色んな本の感想や批評を言い合ったりしたら、どんなに楽しいだろう。

「なんてね」

あり得ない自分の妄想に、けい子は一人で照れて小さく笑うと、また鼻をずれ落ちてくる黒ぶちのメガネを直し、今度こそは本の内容へと、無事戻っていった。

「けい子、あんた、もう少しどうにかしたら？」

ふと、声がする。

店の奥に続いている自宅から戻ってきた、

父親の妹である叔母の富子が、

けい子のざつくりとみつあみにしてある長い髪と、黒ぶちのメガネを見て言う。

けい子はため息をつくと、また本から目を上げて、今度は叔母の富子を見た。

富子なんて古風な名前が相応しくないほど、今日もド派手な格好。

金髪に近い色に染めてある短い髪、目の上の緑色のアイシャドウ、青いカラーコンタクトに、唇にはピンク色のグロス。

いくら仕事で、数件のライブハウスを経営しているからといって、年齢も年齢なのに、膝上のデニムのミニスカートと、体に張り付く短いＴシャツは、どうだろうかと思う。

決して似合っていないわけではないけれど、常識的な問題というか。

「20歳のあんたみたいに若い子が、婆さまみたいな地味で冴えない服を着て、

そうして暗がりで背中丸めて、純文学なんてものを讀んでるのを

見ると、

「なんかぞつとするわ」

相変わらずの毒舌。

この叔母の辞書に「遠慮」とか「思いやり」などという言葉はない。

けい子は自分の格好を見下ろした。

灰色のシャツに紺のジャンパースカート。

別に、古本屋の店番をするには十分な格好だ。

「本当、いつそのこと、私と入れ替わってもらいたいわよ。

その若さを楽しまなくて、どうするの」

富子はため息をついた。

私は私なりに、自分の青春を楽しんでいる。

こうしてかび臭い古本屋の店先に座って、好きな本を一日中読んでいるのだって、

私なりの自分の若さの楽しみ方だ。

けい子は心の中で反論するけれど、

富子には通用しないのは知っているので、黙って本に目を戻した。

「いい事、思いついた！」

富子が両手を叩いて、けい子を見て声を上げる。

けい子はいいい加減、叔母に店から出て行って貰いたくて、眉をしかめた。

「ね、けい子。今度新しくオープンするライブハウスの、

開店記念パーティが今夜あるんだけど、あんたも来なさい」

けい子の手の中の本を奪って、富子は言った。

「婆さまみたいな地味で冴えない服着た、ぞつとするような姪が、

「そんなパーティに行ったら、迷惑でしょう？」

たっぷりの嫌味を込めて、けい子は富子に言う。

「ダンテ、神曲。小難しい本読んでるのね」

富子は、けい子の言葉など聞いていなかったようで、

奪った本の題名を読むと、そこら辺に置いてしまった。

「もう」

けい子は手を伸ばして、読みかけの本を取る。

「そうとなったら、叔母さんについて来なさい。

知り合いの娘に、良いスタイリストがいるのよ」

そして、せっかちに富子は、店の奥に続くドアを開けて中に叫ぶ。

「兄さん！ちよつとけい子借りるから、店に出てきて代わって番し
てよ！」

店中がびりびり震えるような大声。

富子は自分から言い出したことは、

いくら逆らっても、やめるようなタイプではない。

けい子は手に持った分厚い本を渋々置くと、再び大きくため息をついた。

富子に手を引つ張られるようにして連れて行かれたのは、

友人のものだという、ブティック。

高級そうな店のつくりには、灰色のシャツと紺のジャンパースカートの

けい子は、

気後れがする。

そんな姪の気持ちも知らず、富子は店の中へとけい子を引つ張って
行った。

「その子が、電話で言っていた姪御さんね」

富子とどこか似た感じの、でも別な意味で派手な格好をした、年配の女性が出てきて言った。

肩に大きなバラのコサージュをつけて、

黒いスパンコールの、裾の長いドレスを着ている。

見回す店の中の服も、よく見ると高級そうだけれど、どれも自己主張の強い、派手な服が多かった。

「お待たせー」

そして、店の奥からジーンズにＴシャツという、

まるでこの店に似合わない風貌の若い女の子が出てくると、

「私の娘なの」

スパンコールのドレスの人が言った。

「やりがいありそうー」

その人の娘だというジーンズの若い女が、けい子をじろじろと見た。

パール色をしたワンピース、お洒落なピンクのヒールに、

長い黒髪は綺麗にカールされて肩にかかり、

黒ぶちのメガネはコンタクトに。

一重で地味な顔は、まるで外国の女優のような化粧を施されて、

鏡の中にいるのは、普段のけい子とは別人の、

どこかの派手な若い女だった。

「結構いけるじゃない」

富子が、けい子のその姿を見て言う。

「可愛くなつたわね」

スパンコールの女の人が言い、

「全然いいよ！」

ジーンズの女が明るく言った。

全然いいよって、日本語おかしくないか？

けい子は心の中で突っ込みながらも、
黙って鏡に映る自分を見る。

滑稽だ。

けい子は、自分の姿から目をそらした。

いくら外見をインスタントに繕っても、
中身は変わらない。

一体、富子は何がしたいのだろう。

「出会いよ」

まるで自分の心を読んだかのように、富子がけい子に向かって言う。

「恋をしなさい」

けい子の着ているパール色のワンピースの肩を叩いて、
富子は言った。

恋。

けい子は心の中で、その言葉を繰り返して、
自嘲的に、小さく笑った。

本の中なら別だけれど、
リアルな私に、恋など到底、訪れるわけがない。

結局、富子叔母さんは、
私について何も分かつてはいないのだ。

本の中だけでいい。私のいる場所は。
私が人生を生き、恋をして、自分のかけがいのない人を、
見つけるなんて錯覚をするのは、文章の中だけでいいのだ。
それが今までの私の生き方。
そして、これからも同じだろう。

その夜、ライブハウス開店記念のパーティは、
富子に連れられて行くと、
もう宴もたけなわという感じで、始まっていた。
あまり広いとは言えない、新しいライブハウスの中は、
やはり若い人が多い。
たくさんの人でこった返していた。

「ごめんねー、遅くなっちゃって！」
富子はあの大声で叫ぶように言い、
知り合いなどと体を叩き合いながら、
その雑踏の中に溶け込んで行く。

叔母さん！ほつとかないでよ！

人込みに紛れて見えなくなっていく富子の姿に、

けい子は心の中で叫ぶけど、勿論心の声は届かない。

本当に苦手だと思う。

こういう着飾った人たちも、

それ以上に、自分に自信を持って日々をリアルに生きている、

今時のこういう若い人たちはもっと。

私は20歳だけど、こんな場所で自分の存在というものを改めて思い知ると、

どうしても自分は、異質な20歳なのだとは思えない。

けい子はハンドバックを持つ自分の手を、
落ちつかなげに見下ろして、どこか自分のいる場所を見つけようと、
伏せ目がちに店の中を見回した。

ふと隅の方に、

カウンター席があるのが目につく。

けい子は、そちらに向かって歩き出した。

そのカウンター席は、少し奥まった場所にある。
薄暗い店の中でも、テーブルの上を照らすために、
小さなスポットライトが上から席についているので、
どうやら本も読めそうだった。

なんとかたどり着いて、けい子はスツールに腰を落ち着けると、ほっと息を吐く。

富子が帰るというまで、ここに居座ってやろう。

そして、私には「恋」なんて、リアルには訪れないと、知って貰わなければ。

もう二度と、こんな事が無いように。

お祝いモードの店の雑踏に背を向けて、

けい子はバックの中から、文庫本を取り出す。

もう何度も読んでいた本だった。

決して好きな小説とは言えないのだけれど、

その物語の主人公に、自分と似た匂いを感じて、

けい子は、何度も繰り返して読んでいた。

本を読んでいる時だけは、

一人が気にならない。

けい子は、手の中の物語に没頭した。

どの位時間が経ったのか。

ふと、人の気配がして、

けい子は、本から目を上げた。

いつの間にか、カウンター席の、

自分の隣のスツールに座る人がいるのに、気がつく。

そして、その人はどうやら、

けい子の読んでいる本を、脇から覗き込んでいるようだった。

「真面目な本を読んでるんだね」
声がする。

隣に座った、声の主を見たけい子は、
驚いて、目を見開いた。

昼間、家業の古本屋で、太宰と武者小路の小説を買っていた、
あの今時の美しい若い男だった。
茶色いクシャクシャの髪、綺麗な顔、
センスのいいシャツと黒い皮のパンツ。

けい子は、その隣に座った男からうつろたえて目をそらすと、
手の中の本を閉じた。

パーティの席で、一人で根暗に本などを読んでいる自分を、
からかっているのだろうと思う。

「君も、ハンスみたいに生真面目なんだ」

また男は、けい子に話しかける。

カウンターの上にひじについて、手のひらにあごを乗せている。

けい子はその言葉に、

自分が今読んでいた、ヘッセの「車輪の下」の、
主人公のハンスの事かと驚いて、
その今風のイケメンの顔を、改めて振り返って見る。

「ハンスは生真面目というより、不器用だっただけよ」

けい子は恐る恐る口を開いた。

だって、私の妄想が現実になるなんて事があるとは、到底、思えない。

けい子は心の中で呟いた。

「不器用というより、弱かったんだろうな」
目にかかる、前髪を煩そうに手で払いながら、
今時のイケメンの彼は、けい子を真っ直ぐに見て答えた。

けい子は言葉を失っていた。
こんな事が、この世にあるのか。

けい子は、この奇跡に駄目押しをしてみようと思った。

「人間は、しばしば希望にあざむかれるが」

小さく笑みを浮かべた表情で、でも同時に不安もある表情で、
けい子は彼を見て言った。

今日の昼間、彼が買った太宰のパンドラの中の一節なのだ。

けい子の言葉に、その彼は黙ると、苦笑した。
やっぱり、あの本を読んではいないのだろうと、
けい子が少し落胆すると、その彼は続けて口を開いた。

「しかし、また、絶望という観念にも同様にあざむかれる事がある」
かつて、ツルゲーネフが言った。

「あるひとりの人間のそばにいと、
他の人間の存在など問題にならないとき、それが恋である」

まさしく、その時のけい子だった。

彼以外の誰もいらなかった。

けい子は、彼に恋に落ちていた。

それから、カウンター席で、

彼とたくさんの本の話をした。

けい子は今まで自分以外の存在と、

自分と似た価値観での尽きない話したのは、

初めての体験だった。

本、本、本！！

けい子の存在価値を作っているもの達を、

同じように、全身で肯定してくれる存在は初めてだった。

慣れないコンタクトがずれて痛んだので、

けい子はしょうがなく、話の途中で席を立った。

洗面所に行って、コンタクトを外し、

バックに一応保険に入れてきた、いつもの黒ぶちメガネを取り出して、

目にかける。

パール色のワンピースと、そのメガネはミスマッチを超えて、
奇妙だったけれど、でもけい子は、彼の元に急いで戻ろうとした。

そして、見つけたのは、
今時でカッコいい、例の彼の周りに群がる多数の、
今時の可愛い子達。

彼女達は、けい子がいなくなるのを、
待ち構えていたのかもしれない。

彼は優しい。

話しかけて来るものを、決して拒まない。

だから、彼の周りにはどんどん、女が増えていく。

そんな様子に、

けい子の胸が、ずきりと痛む。

でも、こんな痛みも、

もともと、けい子のリアル生活にはあり得ない痛みなのだ。

刹那な神様からの、ご褒美だったのだろう。

けい子と思う。

あんなに異性と楽しく、本について語り合ったのは。

たった一度だけでも、妄想が叶ったとして、

よしとしなければ。けい子は思った。

例え、今日は叔母の知り合いのスタイリストのおかげで、

それなりの格好をしているといえ、

けい子は、明日にはかび臭い「古本屋」という、

洞穴の主に戻るのだから。

けい子は、大勢の若くて可愛い女の子が、
群がっている彼から目をそらすと、
このパーティから帰るために、
叔母の姿を探したのだった。

「もう、帰る」

とうとう、叔母の富子の姿を見つけて、

けい子が言うと、

「あら、そうなの？」

と、言った。

けい子は、この飄々としている叔母が煩わしかった。

きっと、こういう人が「強い」と、言われる人種なのだ。

そして、私は「弱い」と、言われる人種なのは、間違いない。

ああ、彼が言ったハンスと一緒にだ。

私は弱い人間なのだ。

「しょうがないわね」

富子が言った。

しょうがないわね。

けい子も、誰に向かうでもなく、

同じ言葉を心の中で呟いた。

本当に、しょうがない。

何もかもが。

また、いつもの日々に戻る。
家業の古本屋の店番だ。

かび臭いこの洞窟は、
私の住処。

このまま、ここで一生一人でいいと思った。

少し前までは、

ここにいるのはほんの借りの姿なのだと、
そんなうがった事を思ったりしたけれど、
今はもう自分というものを良く知っている。

時代遅れの古本屋の、入り口のガラスの扉が横に引かれる。
けい子は、読んでいる本から目を上げたものの、
こんな場末の小さい古本屋を覗くのは、
また物好きな、冷やかしの客の一人だろうと思っていた。

彼だった。

茶色いクシャクシャの髪、魅力的な整った顔。
今風のセンスの良いシャツとパンツ。

黙っている私と、黙って本を物色する彼。
昨夜は叔母にすすめられたまま、
あんな仮装じみた格好をしていたし、
きつと昨夜ちらりと話をした、風変わりな文学少女が私だとは、
到底気がつくまいと、けい子と思う。

本を物色した後、彼がこちらに持ってきた本は、
シェイクスピアの「ハムレット」

「2000円です」

小さく消え入るように言う、けい子に、

「to be or not to be, that is the question」

彼は言った。

「君はこれをどう解釈するの？」

けい子は購入された本を、袋に入れながら、
その彼の言葉を聞いて、動きを止めた。

しばらく、二人の間に沈黙が流れる。

そして、けい子が呟くように口を開いた。

「このままでいいのか、よくないのか。それが問題だ」

けい子の言葉を聞いて、彼が小さく頷いた。

「俺は、良くないと思ったから、君が消えた後、

パーティ会場の全ての人に、君の事を聞いた。
運良く、こうしてここに來れたけど」

彼の言葉が途切れる。

「君は、俺の事を一体、どう思ったの」

彼が言うのに、けい子は答えられず、

ただ黙っていた。

彼はため息をつき、首を振りながら言う。

「俺にとって、あんたみたいな人は初めてなんだよ」

最初によそそしい口調から、急に砕けつつも、

真剣な口調になる。

「あんたも思わなかった？ 昨夜俺と話をしていた、

こんな相手は、もう二度と現れないかもしれないって」

まさしく、けい子が思った事だった。

だから、けい子は恋に落ちたのだ。

「最後のテスト」

自分の心の中でだけだったはずの言葉が、

思わず口から出てしまう。

「あなたがリアルかどうか」

けい子の消え入るような声に、彼は面白そうに口に笑みを浮かべた。

「リアルね」

馬鹿にされるかと思ったら、彼の言葉は真摯だった。

「優しい言葉で相手を征服できないような人は」

けい子は言って、黙った。

このチェーホフの言葉を言えた人がいるとしたなら、
きつとけい子は、一生その人を敬うだろう。

彼は少し黙って、けい子を見た。

「^{いか}厳つい言葉でも、征服出来ない」

またしても、なんていう事もなく言葉を繋げた。

古書の黴臭い店の中。

彼は近寄ってきて、けい子を覗き込む。

そして、顔を近づけながら言った。

「俺は、本能に従う性質でね。」

文学なんてものは、読みはするけど、

もともとがあんまり頼りないものに、心酔はしてはいないんだ」

彼は言って、けい子の黒ぶちのメガネを手で取ると、

顔を寄せてチュと、軽くけい子に口づけた。

けい子は驚いて、目を見開く。

「あんたも、文学なんて怪しいものじゃなくて、

自分の本能を信じてみたら？」

ここにある本の作者の半分以上は、確実にこの世にはもういないんだから」

彼はまん丸に目を見開いているけい子を見て、笑いながら言った。

「本能」

けい子は彼の言葉を繰り返した。

そして、手に持っている本を放り出した。

確かに、今までの自分の人生においては、

縁の無い言葉だった。

でも、今は意味が理解出来る。

けい子は彼の顔を真っ直ぐに見る。

彼は微笑みながら、でも真剣にけい子を見ていた。

再び、ゆっくりとお互いの顔の距離が縮み、
間に置いたハムレット越しに、唇が重なる。

そうだ、疑問を感じたら、

こうして、何度でも確かめればいいんだ。

あなたも同じ気持ちですか、って。

たった今、この古本屋に置いてある本の全ての著者が、
自分と彼に、拍手やエールを送ってくれている気がした。

リアルに、けい子は幸せだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3375s/>

Style

2011年10月8日08時07分発行